

平成29年度



# 白川小だより

第2号 平成29年4月26日(木)

## 語り継いでいきたい言葉と心

学校長 井戸 さえ子

自分の幼い頃の絵本との出会いは、いここから譲り受けた講談社の絵本シリーズでした。「赤いろうそくと人魚」「マッチ売りの少女」「白雪姫」等々、鮮やかな色彩と東郷青児風の挿絵を思い出します。

でも、絵本を見ることより面白かったのは、夜、布団の中で聞く祖母の昔話でした。裏山へ芝刈りに出かけた近所のお爺さんが、木の切り株に腰を下ろして一休みしている内に、帰りの山道が二股になっており、不思議に思っていると切り株に茶色い尻尾を見つけたという話。鉄砲打ちのどこそこのお爺さんは、猟をするために谷をさかのぼって山の奥へ入り、大きな丸太に腰掛け、キセルに火をつけて一服していると、それは横たわっている大蛇の腹の上で、命からがら慌てて逃げ帰ってきた話等。狐や狸に化かされた話や地元で語り継がれている不思議な出来事、祭りの由来を、子どもながらに精一杯想像を膨らませながら聞き入ったものです。大好きな祖母の語り聞かせは忘れられない思い出です。こんな風に育ってきた世代は、自分たちの年代が最後なのではないかと思っています。

小泉八雲は「人間は知識よりも幻想や想像力に依存する」と言っていますが、大人になって小泉八雲の「日本の面影」や「怪談」に綴られている慎ましく誠実な生き方や辛抱強さ、信仰心、目に見えない霊的なものに惹かれたのは、幼年期の経験と重なるところがあったからだと思っています。

本校は伝統的な言語文化に親しむこととして百人一首が定着していますが、以前から、子供たちに民話に親しんでほしいと願っていました。民話は長い間、多くの人に語り継がれ、創られてきたお話です。語り伝えたい人の気持ちや、生活の知恵がそこにはたくさん込められています。それだけでなく、人間のいろんな面、良くも悪しくも全部の面を語っているように思います。郷土室には、民話収集に情熱を注いだ松谷みよ子さんの昔話を揃えました。今年度、校長と楽集館司書の川上さんにもご協力いただいて「昔話の読み聞かせや語り聞かせ」を行う予定です。白川の昔話も紹介していけたらと考えています。

「昔、美濃の西白川村中川の下須崎というところに、林留次郎とつるという大変仲の良い夫婦が住んでいました。妻のおつるさは・・・」と語り始めたら、子ども達は、どんな風に聞き入るでしょうか。自然と人とのつながりをじっくりと伝えていきたいです。